

投句欄 自由律の泉 ㊟

- 1 句読点にこめられた吐息を読んでいる 久光 良一
- 2 猛獣が空の詩魂 アカホリ フキ
- 3 選挙カーで振る白い手の作り笑い 大岳 次郎
- 4 葉一錠ころがる雨月 野谷 真治
- 5 もう去ぬるんかと目で 植田 博
- 6 一回溶けて固まったチョコレート 愛した証
金澤 ひろあき
- 7 新たな生活の待っている明日のこわい 無 一
- 8 秋の彼岸汗ふきつつ 木村 浩
- 9 保護猫やっとなついで白い秋 原 さつき
- 10 手帳を睨む睨む日にちは増えない 青井 こおり
- 11 廃屋に蔦からみついで大炎上 平岡 久美子
- 12 心から背伸びして杖を蹴飛ばす 田中 直心
- 13 星になつてのるゴンドラの月 竹内 朋子
- 14 刺された棘の蒼 今は抜かずにおく 檜 幽可
- 15 笑み来る孫の背後から黒い銃口迫る 小山 榮康
- 16 懐かしい道を夕やけに向かつて歩いている 山本 説子
- 17 真っ赤に燃える大きな夕陽 明日は笑顔よ 増田 壽恵子
- 18 初空に龍の背中は光りつらなり 佐川 智英実
- 19 カレンダー今年を命をめぐれるだろうか 富永 鳩山
- 20 野良はボスの歩みで秋の陽へ 富永 順子
- 21 束ねた髪の後悔はしない 篠原 紀子

22 冬満月 ボクは大人になれるでしょうか 井尾 良子

23 風吹いて花びらの間に西陽こぼれる 荻島 架人

24 知らぬふりきめこまれ上げかけの手を下げる

湯原 柳泉洞

25 虫の音の日常ぱったり消えた夜 佐瀬 風井梧

26 色々とあり老友の眩き葉書を埋め尽くす 白松 いちろう

27 花終ほろほるとホロホロ花落つる 中山 倭文子

28 柿食えば石を蹴っていた少年の頃 伊藤 哲英

29 家に帰る家族のアルバムを捨てに 平林 吉明

30 鉄橋を渡るこの町の月のかたち さいとう こう

31 どんとろん秋の光の中へどろん 黒瀬 文子

32 世話をかけるつもりはないがひとりには寂しい

ちば つゆこ

● 泉 ⑱より 一句鑑賞

さりげなくこちら向いてる銃口が気になる 久光 良一

▼銃口は、誰でも、恐いものだし、気にもなるものと思います。「さりげなく」が恐さをなお更にしています。 (大岳 次郎)

▼現代の不安をストレートに詠んでいて、心の奥まで届いた句。山頭火にも戦没者を詠んだ句があり悲しみに満ちているが、この句にはまたそんな時代にならないようにという願いも感じる。時代への違和感を大切にしたい。 (金澤 ひろあき)

▼愚かな戦争が止まない。そしてその銃口は愛国心を説くロシヤ兵の若者にも私の孫にも向かってくる。 (小山 榮康)

煩惱ですか いや引越し荷物です 金澤 ひろあき

▼共感します。引き出しの中も、押し入れも、物置のダンボールもすべて煩惱です。 (佐川 智英実)

風も雲も春

アカホリ フキ

▼春、私の好きな季節です。

▼深い句ですね。五文字の中に沢山の春を感じ、次から次へと想像がふくらみ思い出までも蘇ってまいりました。 (山本 説子)

むなしさに風穴

無 一

▼短い文言にいろいろな思いが込められていると思います。むなししい思いにふっと風穴があく、という希望が感じられるところが好きです。
(青井 こおり)

▼世の中虚しいニュースが絶えません。何とかして新風を吹き込みたい気持ちが伝わってきます。短律の素晴らしい一句です。
(白松 いちろう)

▼わずか9文字の潔さ。余分なものは捨て、まだまだ生きてやるといふたくましさ伝わります。
(原 さつき)

途中まで虹が出るくしゃみ

野谷 真治

▼ユーモアの中に叙情的な雰囲気のある素敵な句です。虹のかかる途中でくしゃみをしてしまい、虹が途中で止まってしまったなんてなかなかできない発想です。もっと深く読めば、何となく自分の不甲斐なさから、志半ばで失速してしまったようにも。明るくて、でももの悲しくて、心惹かれます。
(篠原 紀子)

醜さも美しさも吸い込む桜の慈愛

竹内 朋子

▼桜のイメージがしみる春を思い出します。毎年、心がゆれます。
(アカホリ フキ)

▼私の想像をはるかに越えた悲しいつらいこの頃です。人々の心をなごませる桜も慈愛をこめて咲いても受け止められないでいるのでは。来年こそは私を見て笑って欲しいと精一杯咲くことでしよう。
(井尾 良子)

こんなにも心踊る 孫は希望の春

山本 説子

▼老いの身にとつて心踊るものは幼い子供の成長である。八十八歳になつた私にも曾孫ができて、日々成長する幼い姿に元気をもらっている。孫に希望の春を感じて、心踊らせている作者の気持ちがよくわかる。
(久光 良一)

空にまだ月があるからキャベツの力走

井尾 良子

▼「キャベツの力走」にひきつけられた。月と、キャベツの組合せも面白いです。
(野谷 真治)

悪態つく女の唇は滅びない基地

黒瀬 文子

▼男の裏表であれば、そこそこに解りもしますが、こと「女性」に関して云えば、全く解りません。作者の言われるように、女性が男性に対して反撃に転じたら大変、男性が「御免なさい」と白旗を掲げるまでは、その攻撃は止むことなく続けられます。まさに不滅の要塞ですね。黒瀬さんも、ですかね。
(檜 幽可)

ポーチの落としもの亭主の写真入れたまま

平岡 久美子

▼さて、落とし主は？ 写真を持ち歩く人だから深く愛している方か、先立たれていつも一緒にいたいと思っておられる方か？ その前に、大事なものを落としてしまったのは何故なのか？ (伊藤 哲英)
▼笑い吹き出してしまいました。一番大切なものですね……。『滑稽』どうぞお気をつけて……お願い致します。
(竹内 朋子)

入学にハンドル支えママ前屈み

田中 直心

▼ハンドルはなんのハンドルだろう。父がおらず慣れない車に体を緊張させておるのか。支え、というのが解釈の面白さを拡大する。子供

がこんな日に自転車に乗りたがるのを支えながらの前屈みというのもあるか。

(湯原 柳泉洞)

夢に見る君はいつも列車の窓外

檜 幽司

▼夢を見ると大切な人は、いつも窓の外にいらっしやいます。列車が発するの駅のホームから見つめています。忘れきれない人との想い、お互い大切なのに、一線を画す切ない気持ちの夜行列車の別れを感じます。窓に映っているだけのような、妖気的な感じもしてきます。暗さと切なさを感じます。

(田中直心)

今日も遅れる山手線内回りの人生

平林 吉明

▼たまにしか東京へは行きませんが、なぜか事故などで電車が遅れるのが約5割です。そして乗り換えて内回りです。同感です。こんな風に自由律俳句に。すばらしいです。

(木村 浩)

春陽のうらら蝶二つ輪になって上る

佐瀬 風井梧

▼夏の終わり頃でした。我が家の庭の空中で黄と黒の縞の蝶が、あなたの句のようにしていました。二人で一緒のことを為す素晴らしさを懐かしく思い出させて頂きました。ひとりはやっぱり寂しいですね。

(増田 壽恵子)

葬儀土産の菊も枯れ果ててさようなら

湯原 柳泉洞

▼この数年間母、兄弟、叔父叔母等亡くし、この句の気持ちは身にしみる思いです。作者が葬儀から持ち帰った菊の花を仏壇に飾り、その菊がくたつとなり枯れている様をみた。その瞬間に心によぎった思いが句に吹き込まれる。時間が経過して、悲しみもだんだん薄れてきた

頃、菊の花をみて亡くなった人を悲しさから静かな気持ちで思い返され、さよならを言える気持ちになった。「さよなら」の句が迫ってくる。

(佐瀬 風井梧)

先生おりにきたはつ夏のターミナル

さいとう こう

▼今年私は恩師を亡くしました。高校の時からですからもう60年以上見守ってもらったと思います。会えばいつもそのころに戻る事が出来ました。この句のようにターミナルで先生と会いたかったと切なく思いました。

(平岡 久美子)

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

送先 〒193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール kumiko801@wh-wing.net

締め切り 2024年1月31日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、原則的に自由律俳句協会の公式X(旧ツイッター)でも紹介させていただきます。Xでの紹介を希望されない方は、投句の際にその旨をお知らせください(投句用紙にはチェック欄があります)。